先端課題研究 19 文献レビュー(歴史学)
一橋大学大学院言語社会研究科博士後期課程
鈴木　良和

ジョヴァンニ・レーヴィ「ミクロストリアと複雑さの回復」

Giovanni Levi, “Microhistory and Recovery of Complexity”, Susanna Fellman and Marjatta Rahikainen (eds.), *Historical Knowledge: In Quest of Theory, Method and Evidence*, Cambridge Scholars Publishing, 2012, pp. 121-132.

紹介

著者のジョヴァンニ・レーヴィは、「ミクロストリア叢書」の刊行メンバーの一人であり、ギンズブルグとともにイタリアのミクロストリアの旗手として知られている。今回取り上げる論文では、1970 年代末のミクロストリアの歴史家たちに共有されていた問題意識や方法論が回顧され、現在におけるミクロストリアの意義についても述べられている。

○ピーター・バークによるミクロストリアの解釈[1]（pp. 121-123）

・ミクロストリアほど多くのさまざまな誤解を生みだした歴史学のアプローチは少ないだろう。その原因の一つは、ミクロストリアという名称そのものにある。この名称が提示しているのは、方法論、詳細な分析、一点に焦点を絞った深い観察というよりも、細部、小さなスケールで生じた事柄、個々の事件を解釈することなのである。そのため、ミクロストリアが普及したことは「物語の復活」や「事件への回帰」といった現象と結びついていた。

・ミクロストリアには次の二つの対立する解釈が存在する。
①方法よりも内容を重視する伝統的な歴史理論に結びつく解釈（バークの立場）
②方法論と歴史研究の認識的な側面の議論を強調する解釈　（レーヴィの立場）

・①の立場としてはピーター・バークが代表的である。バークは「主題」(subject matter)解釈によってミクロストリアに重要な貢献をおこなった。彼はミクロストリアを次の三点によって特徴づけた。

1．「中道的な定義は、より大きな諸問題を明るみに出すためにおこなわれるローカルで小さなスケールの研究を「ミクロストリア」(micro-history)と呼ぶことである･･･。ポイントは、ハンス・メディックの言葉でいえば、ローカル・ヒストリーを一般史(general history)として見ること・・・コミュニティの研究である・・・」。

2．「二番目のタイプのミクロストリアは、「ミクロのバイオグラフィ」と呼ばれている。つまり、比較的重要でない個人についてのバイオグラフィである」。

[1] ○で表記した小見出しはレポート作者が付した。

３.「三番目のタイプのミクロストリアは、より広い反響を持ったり持たなかったりするような小さなスケールの事件についての語りである。いわゆる、「物語の復活」もまたミクロストリアに支持を与えている」。

・さらにバークにとってミクロストリアの誕生は、大きな物語（Grand Narrative）への信頼がポストモダン的に損なわれたこと、構造に対する批判、個人を強調することと結びついていた。
・バークの考えでは、ミクロストリアの新しさと特徴は、その主題(subject matter)に関係している。つまり、下からの歴史のことである。これは、大きなイデオロギーの危機以前に歴史に当然そなわっていると考えられた認識的な側面(cognitive aspect)を暗に批判して個人や事件に焦点を当てることであり、歴史を過去の真実の探求だと考えることに対する、また、歴史が物語やフィクションへと瓦解してしまったことに対する不信感の表明である。
➡バークのこうした解釈は正当だが、1970 年代末におけるイタリアの研究者たちの小集団の経験は、バークの解釈とはかなり異なるものだった。以下において著者は、個人的なアクセントを付けつつミクロストリアについて論じていく。

○「ミクロストリア叢書」刊行の事情 (pp. 123-124)

・1970 年代末におけるミクロストリアの誕生は、そもそも政治的原因に由来していた。この時期、イタリアの左翼は劣勢に立たされており、多くの緊張や不可解な事件が十分に解決されずにあった。
・たとえば、1968 年の「熱い秋」後の保守派の反撃、テロリズム、爆弾攻撃、労働組合運動の失敗、労働者の代表の要求、平等主義の計画。こうしたことがイタリアにおける革新勢力の弱さと政治分析の限界や甘さを浮き彫りにしたのである。
・労働者階級の長い伝統から生まれたイタリアの左翼は、社会構造の静態的なモデルで自らの立場を固め、階級への所属だけに基づいて、ある種自動的に政治的、イデオロギー的な選択をおこなうという観念に依拠していた。
・社会と経済の仕組みに生じた甚大な変化を前にして、過度に単純化した解釈が本質的に不毛であるということが分かり始めたのである。このことは歴史学、労働者階級の運動の歴史やイタリア経済のいびつな発展の歴史的解釈との関係においても明らかだった。
➡著者にとって、ミクロストリアの誕生は分析の十分な複雑さを再び取り戻すためであった。このアプローチには重要なモデルが存在した。イギリスのマルクス主義史家 E. P. トムスンによって切り開かれたグラムシ解釈、人類学におけるマンチェスター学派の作品（たとえば J. C. ミッチェル)、あるいは N. Z.デーヴィスのような孤立しているが非常に革新的な研究者たちである。

・「複雑さの回復」(the recovery of complexity)と呼ばれる問題に焦点を当てる議論が始まったのは、*Quaderni Storici* 誌の編集チームの間においてであった。こうして、エイナウディ出版から「ミクロストリア叢書」(Microstorie)が著者のサインのもとで 1980-1981 年に刊行され始めた。

〇ミクロストリアの性質 (pp. 124-126)

・ミクロストリアにおいて重要なのは議論の方式である。ミクロストリアは、第一に、歴史家が従っているゲームの規則を隠すことなく語ろうとする。そうすることで、歴史が構築されるプロセスを公表する。成功した道のりと行き止まりの両方を示し、問いが形づくられ、答えが探求される仕方を提示するのである。

・ミクロストリアは必ずしも、排除されたものや、取るに足りない人たちや、遠く離れた事柄に関する歴史である必要はない。ミクロストリアが目指すのは、むしろ時や状況や人々を再構築(reconstruct)することである。特定の文脈のなかで分析的な目をもって調査することによって、ミクロストリアはその対象に中身と色合いを与えるのである。

・ミクロストリアは、スケールを縮小することによって、歴史家の概念的な道具を議論の的にする。たとえば、民衆文化、中流階級、労働者階級、絶対主義国家、小作人。こうした概念は有益ではあるけれども、今日ではこれまで以上に具体的な諸事件を通して説明され確認されることが求められている。抽出された個人は具体的な諸事件のなかに挿入されなければならない。

・「ミクロストリア叢書」というタイトルを選ぶにあたって、著者たちは次のような考察から始めた。これらの考察は、社会的な事柄に影響する因果関係のメカニズムに関する次の二つの研究方法によって提示されたものだった。

①規範的システムを意識的に分離すること

だが、これによって社会の全体が説明できるなどと主張するわけではない。必要なのは、パズルの一つのピースを研究者と読者のスポットライトのもとに分離することである。一つのピースが機能するためには、全体の文脈のなかにはめられる必要があるが、それは実験的に真空のなかに置かれる。

②文脈のなかで事件や人々を研究すること

文脈というのは、自由な選択や束縛が絡まり合う複雑な相互作用のことである。そこにおいて諸個人や諸集団は、彼らを統御する複数の対立する規範的システムの裂け目のなかで行為する。通常のもの、日常的なものが歴史における主人公となり、個々の特定の状況が複雑な社会現象を説明できるような強烈な焦点となる。

・ミクロストリアのキーワード。
①レンズあるいは顕微鏡　②実験　③文脈　④複雑さ　⑤選択　⑥束縛　⑦裂け目　⑧衝突　⑨観点
➡これらの語彙が示しているのは、理論であるよりもむしろ一連の実践と方法である。

〇ミクロストリアを取り巻く状況 (pp. 126-127)

・ミクロストリアのアプローチは歴史学の世界において微妙な時期に達した。
・ソビエト連邦の危機は、二極化が崩壊した後の世界秩序の断片化とともに、歴史学の議論に直ちにはっきり感じられるような荒々しい影響を与えた。それはマルクス主義者を混乱させただけではない。社会史全体、特にフランスのアナール学派は「転換点」について語るようになり、インドの「サバルタン・スタディーズ」はマルクス主義を直ちに捨て去って「ポストコロニアル・スタディーズ」の雑多なアプローチを採用した。文化の諸テーマが次第に関心の中心を占めるようになってきたが、それには脱構築と結びつく懐疑主義による浸食や、歴史学とフィクションの同一視を伴っていた。歴史学はリベラルな学問の間で中心性を失ってしまった。さらに、マス・メディアが嬉々として提示する歴史の単純化や性急で表面的な扱いを前にして、歴史学の目的に関する感覚も変化してきた。研究に避けることのできないゆっくりとした足取りも、歴史的な諸事件を誠実に再構築するときに不可欠な複雑さも、こうした事態に直面する準備ができていなかったのである。

・おそらく、ミクロストリアもまた歪められた解釈や過度の単純化を被ることは避けられなかった。だがそれでも、ミクロストリアに特徴的なアプローチは存続したし、いまなおそれは力強く響き続けている。
・ミクロストリアがとりわけ示そうと目指していたのは、歴史家が一般化できること、一般化すべきことは諸々の問いであるということである。そうした問いは、個々の事件にユニークな特殊性を与える限り、異なる時間的、地理的文脈のなかにも置くことができる。共通の普遍的な真実が発見されることがもはや信じられることのない世界においては、人間の編成原理とか人がどのように自分の状況を理解しているかを問うのに、ミクロストリアの実践は必要とされ続けるのである。

〇ミクロストリアの特徴 (pp. 127-131)

・ミクロストリアの特徴は以下のように分類することができる。
①ミクロストリアは、事件が絶対的に反復不可能であると主張しつつも、個別事例からの一般化の可能性を維持したい歴史家の優先事項(priorities)を示している。ミクロス

トリア的に考えれば、歴史とは事例の特殊性に焦点を当てるとともに、そうした事例の帰結ではなく、事例から生じる問いを一般化する学問である。おなじ問いは異なる文脈において投げかけることができるが、それは類似点や相似点を引き出そうとするためではなく、特定の事例における妥当な答えを見つけるためである。したがって、歴史研究はいくつかの、あるいは一つの特定の事例から出発して、それぞれの事例の有機的諸関係や、特殊な諸々の事件の解釈をその固有性を失わずに文脈化してくれる一般的な問いを特定するのである。

②したがって、ミクロストリアは典型的、象徴的な事例を追求するのではない。典型的な文脈、典型的な人物、典型的な場所なんてものは存在しないということを否定するならば、それは歴史の裏切りである。典型的な事例は存在しないが、一般的で適切な問いというのは存在する。

③ミクロストリアは、それにもかかわらず、一般的な真実の探求を捨て去ることで「大きな物語」に反対して、小さな事件や個別的な歴史を拵えようとするわけではない。「大きな物語」は、普遍的に妥当する法則を探求する際に構造機能主義者がとる帰納的推論のモデルに従い、現実の事件や人々をまるで関係がないかのように無視することによって、歴史の根本的な部分に背を向けた。したがって、ミクロストリアは一般的な文脈からの観察下に事実を抽象するのではなく、単一の事例を厳密に調査することによって、現実の再構築を可能とする諸々の根本的な問いを打ち立てるのである。そうした再構築は確かに部分的であるけれども、それでも真実全体の重要な諸断片を含んでいる。

④ミクロストリアは、わたしたちの現実認識を変容させる。マクロな解釈が目指すのは、直線性、一貫性、確実性である。この解釈は、提示されたデータのなかで完全であるという印象を伝えようとするか、少なくとも、権威的で、首尾一貫した、包括的な見解であるという印象を伝えようとする。ミクロストリアが取り組んできたのは、非確実性、非一貫性、非直線性を取り戻すことである。

⑤ミクロストリアの出発点は、現実が整合的ではないこと、わたしたちの知識は必ず部分的なものであることの自覚である。このことは、ミクロストリアが現実へのアプローチをどこまでも先送りにするということを意味しているのではない。そうではなく、さらなる議論や他の可能な解釈がありうると認めることを意味するのである。ミクロストリアの作品の中心にあるのは方法である。顕微鏡を通して事実を観察することは、わたしたちの現実理解を広げ、認識の武器庫に追加される諸々の新しい問いの定式化を可能にする。大きな物語を退けることが問題なのではない。そうした物語

を近くから調べ上げ、それらの単純化を訂正したり観点や想定を修正することが問題なのである。

⑥「その場合、つぎのようなものがミクロストーリアを特徴づける共通の問題や立場となる。すなわち、スケールの縮小、合理性に関する論争、学問的パラダイムとしての小さな糸口、特殊なもの（しかし、社会的なものには対立しない）の役割、受容と叙述への注意、文脈の特殊な定義、相対主義の拒否といったものがそれである」[2]。これは 1991 年に著者が書いた論文の総合的な判断である。この論文が示そうとしていたのは、ミクロストリアの歴史家たちのテーマや態度がどれほど離れていても、社会史と文化史のあいだにどれほど溝があっても、彼らが取り組んでいる方法や問題は根本的に同質のものであるということだった。

・最後にピーター・バークについて。
・著者にとって明らかだと思われるのは、バークがミクロストリアを主題(subject)によって特徴づけたことは、ミクロストリアを誤って表現しているばかりか、「われわれ」の著作の現実や目的からほど遠い仕事に貢献しているということである。

[2] ジョヴァンニ・レーヴィ（谷口健治訳）「ミクロストーリア」ピーター・バーク編『ニュー・ヒストリーの現在：歴史叙述の新しい展望』人文書院、1996 年、129 頁。